

まほろば



2014.12
第160号

第6回院内パス大会を開催して

今年のテーマは「電子パスを使ってみよう」で、電子パスを模擬患者に使用するグループワークを計画し、看護部を中心に薬剤科、検査科、放射線科、理学療法、栄養管理室、事務部、医局と多職種59名の参加があり関心の高さを感じました。電子カルテから患者様を選択、パス適用、アウトカム評価、バリエーション記入、パスを終了するという一連の流れを体験しました。普段電子カルテに触れる機会の少ない職員も電子カルテの動きが判り有意義な大会となったようです。

今年7月電子カルテが導入されると同時に耳鼻咽喉科で電子パスを使用開始し、その後母子センター小児科、乳腺外科、呼吸器外来と続々電子化パスの使用が始まり、今後も続々承認予定です。パスの使用でより良い医療を提供するとともに、患者様・医療者ともに高い満足が得られるようこれからも活動を続けます。

最後に今回のパス大会のため電子カルテ、モニター等の準備に病院内外の多くのスタッフが協力してくれたことに深く感謝します。

クリティカルパス委員会委員長：黒田 令子



「認知症看護について理解を深める」勉強会を終えて

当院では、認知症を抱えて入院される患者様が多くなり、看護師からどのように対応したらよいかわかるという声が聞こえていました。そこで、地域医療連携室と共同で認知症についての基礎知識、ユマニチュードという接近方法について勉強会を行いました。ユマニチュードは、フランスで考案された150の具体的な接近方法の名称で、見る、立つ、触れる、話しかけるといった4つの方法が柱で、患者様の心に寄り添った関わりが大切であるといわれている接近方法です。当日は講義とユマニチュードの実際のDVDを使用して行い、38名の参加がありました。終了後のアンケートからは「明日からの看護に役立てたい」「自分のケアを見直す機会になった」といった声が多く聞かれました。

認知症を抱えている患者様に寄り添う姿勢を大切に看護をする、新たな一歩となる勉強会になったと思います。勉強会に出席できなかった看護師にも勉強会の内容を広め、患者様の心に寄り添ったよりよい看護を提供していきたいと思います。

緩和ケア認定看護師：佐井 菜央美



第42回 ひろさき周産期医療連絡会

11月22日第42回ひろさき周産期医療連絡会を開催させていただきました。当院母子センターへの紹介患者の概要を小児科藤田先生、産婦人科丹藤先生にお話しいただき、特別講演には大阪府立母子保健総合医療センター新生児科主任部長の北島博之先生に、MRSAなどの新生児感染症、NICUからみた母と子のありかたについてご講演いただきました。MRSAに関しては自分が伝播すると自覚することの大事さを教えていただきました。母子関係では、われわれの社会を支えていく子供たちをはぐくむために母親をいかに支援していくか、幸せなお産をすることの大切さ、子供の自信を担保するための母親の役割と、その手段としての母乳育児の重要性などをお話しいただきました。でも現実はずしも理想的にはすみません。お産が

うまくいかないこともあるし母乳育児がうまくいかないこともあります。そこをうまくサポートしていくのがこれからの我々の役割でもあるのかなと思いました。

小児科医長：杉本 和彦



大阪府立母子保健総合医療センター新生児科主任部長 北島博之先生



8th. 北東北国立病院医療研究発表会

青森病院、八戸病院、盛岡病院、秋田病院、松丘保養園、当院合同による北東北国立病院医療研究会が 11 月 29 日（土曜日）当院附属看護学校で開催されました。今回で第 8 回にもなります。これまでの年 2 回から今年度年 1 回の開催となったこともあり演題数は前回の 64 題から大幅に増加し、計 102 題の発表がおこなわれました。最近の趨勢としては、職種を問わず統計学を用いた演題が増えてきたことが挙げられます。医療における統計学は「エビデンスに基づく」という考え方とともに 90 年代頃から急速に普及したものです。

ではなぜ必要とされるのでしょうか。これより前の時代には医療における正しい判断とは「生物

学的メカニズム」と「専門家の経験と勘」であったとされます。統計学はこれに加えてより適切な判断を下すための手法として用いられるようになりました。データの取り方やプロセスを明らかにすることで、「水掛け論」から脱却し、だれもが建設的な議論に参加することが可能になるということです。昨今の IT の普及のおかげで、統計データにアクセスすることは日常的に行われるようになり、統計学の在り方や理解すべき考え方は質・量ともに大きく変化しております。複雑な医療現場においては職種を問わず、より適切な判断を下せるよう、統計学的な考え方を積極的に取り入れることが大切だと感じました。

臨床研究部長：石黒 陽

〈ポスター発表〉



〈口演発表〉





防災訓練 大規模地震を想定して

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災から既に 3 年が経過していますが、当時の激しい揺れとその後に起きた停電などによる混乱した状況は、現在も記憶に残っているところです。

今回当院において初めてとなる大規模地震に対応した防災訓練が平成 26 年 11 月 7 日に実施されました。地震想定は、マグニチュード 9.0 震度 6 強であり、人が立っていることができず、家具などは転倒し壁や窓ガラスが破損・落下するというものであり、病棟看護師 3 名が負傷し、1 名は頭部負傷により意識が無く、3 階病棟の機能は失われ避難が必要となったという状況でした。

訓練当日は、初めての訓練ということで病棟全体に緊張感があり、発災直後の対応として、人的被害の把握・ライフラインの把握・頭部に重症の

外傷を負った看護師の救護・火災の発生・通報・避難路の確保・患者の避難誘導といった多岐に渡る内容を、実践に即した行動をとることにより臨場感のある訓練とすることが出来たと思います。しかし、過去の災害事例を見るまでもなく、災害は突然襲ってきて、これまでの環境を一瞬にして破壊してしまい、患者様のみならず私たちスタッフの生命も危険にさらされる事になります。そういった状況下で、パニックに陥ること無く冷静に状況を把握し、適切に対応できることが重要であり、そのためには訓練を重ね一人一人が災害に対する意識を高めていくことが、大切であるとあらためて学ぶ事が出来ました。

3階病棟 看護師長：多田 恭子
3階病棟 副看護師長：柳引 まり子

円滑なコミュニケーションのための研修会

働く人間にとって必要なものは何でしょうか？それは、円滑な人間関係を築き上げるスキル能力だと考えます。つまりは、対人関係で円滑なコミュニケーションをとれる能力です。初対面の人でもすぐに打ち解けられ、自分の考えを伝え相手の考えを引き出し、相手の立場になれる思いやりにあふれている人。なかなか難しそうですね。この能力を磨くことはただ事ではありません。

どうしたら、そうなれるのか。

(株) ヒューマンスキル開発センターでは、Transactional Analysis「(交流分析): 以下 TA」という手法を用いた研修を行っています。12月2日に代表取締役 笠井 徳子 様を講師にお迎えして研修を開催しました。TA は、極めて優れた“人間を分析し理解するための理論”です。TA の目的は「自分に気づき、自分を知り、自分を変える」ためのものであり、他者を操作し変えるものではありません。自分を知り、自分が他の人とどのよ

うに関わっているか自分の本来の生き方を知るための一つの道具です。ゴールは、個人の自律性を高める事であり、今回の研修では、その理論を自分に当てはめて、自分を分析し、実感として自分を理解することができました。

研修は、実技が多く興味深い内容で楽しく参加する事ができました。また、日々の業務に取り入れられることがたくさんあり、患者様や職員同士のコミュニケーションにも活用できる内容でした。

今回は、院内の多職種から40名の参加でしたが、研修後のアンケートには「もっと多くのスタッフに参加していただきたい。」「心が軽くなりました。」といった意見が多数寄せられました。

今般の研修にて、職員一人一人が自分を振り返り、他者をサポートする「より良いチームプレーヤー」として、病院を支え組織も個人も成長していければと思います。

管理課長：加藤 久弥



平成26年度母子保健ネットワーク会議

10月17日、院内にて母子保健ネットワーク会議が今年も開催されました。

この会は行政と医療機関がより密接に連携を取ることで、津軽地域の母子医療が充実するようという目的で去年から毎年定期的開催されている会です。今回は、市内の各医療機関・保健所・児童相談所・保健師さん達とたくさんの参加があり活発な会となりました。

普段はなかなか皆で集まることのない人々が集

まり、顔の見える会として、地元の母子保健に関して様々な立場からご意見をいただき、皆で考えてみるといった垣根のない会となりました。また、自分達が各々の活動を行う上で、どんな分野を強化すべきかなど今後の問題点についても具体的に話しあいました。今後も密に連携を取ること
で妊産婦さんたちと赤ちゃん、こどもたちのお役に立てればと皆で願っております。

小児科医師：三上 珠希



【シリーズ 認定看護師から】

4月に弘前病院に異動となり、新任の師長として外来で勤務させていただいております。救急看護認定看護師は、救急搬送となった患者様のケアを行い、一次救命処置（BLS）や二次救命処置（ACLS）などチームの一員として実践し、スタッフへの指導を行います。また患者様の病

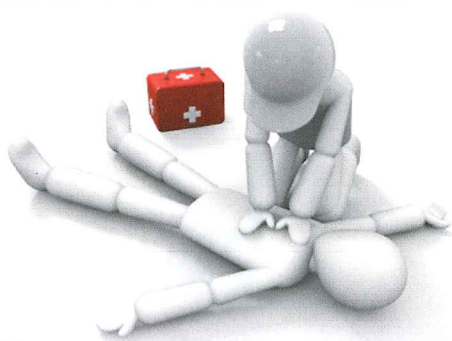
態をアセスメントし、トリアージや迅速な処置・検査の介助を行うことも役割の1つになります。

救急患者様は突然の発症がほとんどで、本人・家族の不安や悲嘆は大きいものです。

治療や処置が優先されがちな現場で、少しでも不安が軽減できるよう“こころのケア”を早期から実践していくことが大切だと感じています。

これからも患者様が急性期を乗り越え、無事に社会復帰されることを願いながら日々の看護にあたっていきたいと思います。また師長としてスタッフの教育を行い、現場をマネジメントしていけるよう努めたいと思います。

救急看護認定看護師：新井谷 敦子





よさこい津軽 踊れや歌へ華やかに

11月9日(日)に、機能訓練棟において「よさこい津軽」を開催しました。会場を埋め尽くした約100名の観客の前でAOMORI花嵐桜組・弘前厚生学院による演舞を披露していただきました。「よさこい」の開催は当院で初めての試みでしたが、華麗に躍動する演舞は会場内を感動で包み込み観客の皆様にも元気を与えていました。

AOMORI花嵐桜組による「青森三大火祭り」をテーマにした演舞から始まりました。季節は秋から冬に向かっていますが、青森にとっては欠かせない夏の風物詩、青森・弘前・五所川原の夏祭りです。また、AOMORI花嵐桜組は、大間のまぐろを今年のテーマとし1年かけて活動しています。

演舞の後半では、海の女神「天妃様」のイメージを楽しむことができました。

厚生学院からは、「厚生学院オリジナル」と「よっしゃこい」の演舞です。最後に合同演舞で「タッタカ♪たか丸くん」・「よっちょれ」です。「よっちょれ」では、観客にも鳴子を渡し、演舞に合わせてカシャッ、カシャッと一緒に鳴子を鳴らす力強い音が会場内を響き渡っていました。

演舞が終了し、演舞した皆様が会場出口でお見送りをしていただきましたが、感動とうれしさで涙する方もいました。本当にありがとうございました。

管理課給与係：横山 多樹子



外来診療一覽

◆外来医師診療一覽表 (2014年12月1日現在)

診療科	区分	月	火	水	木	金
循環器内科		熊本 秀樹	熊本 秀樹	熊本 秀樹	熊本 秀樹	熊本 秀樹
呼吸器科		石岡 佳子 下山 亜矢子	山本 勝丸 下山 亜矢子	中川 英之 下山 亜矢子	山本 勝丸 下山 亜矢子 石岡 佳子	中川 英之 下山 亜矢子
消化器・血液内科		間山 恒 高杉 かおり 佐藤 年信 石黒 陽	— 松木 明彦 高杉 かおり 石黒 陽	高杉 かおり 松木 明彦 佐藤 年信 —	— 間山 恒 高杉 かおり/松木 明彦 石黒 陽	間山 恒 松木 明彦 佐藤 年信 石黒 陽
小児科		杉本 和彦 三上 珠希	佐藤 工 藤田 円	佐藤 啓 三上 珠希	佐藤 工 藤田 円	杉本 和彦 佐藤 啓
外科		田澤 俊幸	三上 勝也	田澤 俊幸	神 寛之	三上 勝也
乳腺外科		小田桐 弘毅	小田桐 弘毅	小田桐 弘毅	櫻庭 弘康	小田桐 弘毅
整形外科	午前	三浦 和知 神 裕道	秋元 博之 三浦 和知	秋元 博之 神 裕道	休診 (手術)	秋元 博之 三浦 和知 神 裕道
	午後	—	—	—		休診
脳神経外科		—	—	木村 正英	—	—
皮膚科	午前	熊野 高行 佐藤 正憲	佐藤 正憲 熊野 高行	佐藤 正憲 熊野 高行	熊野 高行 佐藤 正憲	熊野 高行 佐藤 正憲
	午後	● 予約	● 手術/検査	● 予約	● 手術/検査	● 予約
泌尿器科	午前	神村 典孝	神村 典孝	弘前大学医師	神村 典孝	神村 典孝
	午後	検査	検査	手術	検査	手術
産婦人科		木村 秀崇 木村 恵理子	丹藤 伴江 谷口 綾亮	丹藤 伴江 田中 加奈子	● 妊婦健診 (一般外来休診)	木村 秀崇 松村 由紀子
眼科		蒔苗 順義	蒔苗 順義	蒔苗 順義	蒔苗 順義	蒔苗 順義
耳鼻咽喉科		黒田 令子	黒田 令子	● 手術 (一般外来休診)	黒田 令子	黒田 令子 三浦 智也
放射線科	診断	佐々木 幸雄	佐々木 幸雄	佐々木 幸雄	佐々木 幸雄	佐々木 幸雄
	治療	—	—	川口 英夫 (午後)	—	川口 英夫 (午後)
女性専用外来		杉本 菜穂子(※予約制/第1・第3火曜日午後診療)				
セカンドオピニオン		—	—	—	今 充	—

※ 学会、出張などにより担当医師が替わる場合があります。

今月の川柳

★川柳募集★ あなたの川柳をお待ちしています。

花嵐 北のまほろば 胸焦がす

(大間のマグロ)

看護師の 笑顔で食事もうまくなり

(パール)

※掲載作品は広報誌編集委員会を選出したものです。

お知らせ

患者相談窓口

『患者相談室』のMSW(メディカルソーシャルワーカー)が対応していますので、お気軽にお尋ね下さい。

編集委員会より

当院の広報誌『まほろば』は、地域に信頼され、納得の医療で地域に貢献しつつ、地域と協働して歩む病院づくりを目指し、地域の方々を対象に編集しております。皆さまから病院に対して『不安なことや不満足なこと』『ご批判やご指摘』また、『お褒めのことば』を職員一同お待ちしております。

発行元



Hirosaki National Hospital
独立行政法人国立病院機構

弘前病院

責任者：副院長 小田桐 弘毅

〒036-8545 弘前市大字富野町1番地

TEL 0172-32-4311

FAX 0172-33-8614

URL <http://www.aoi-mori.net/~hirosaki/>